●――武道の再生に向けて

現在、われわれが「武道」と称している種目は、日本武道協議会に加盟する柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道の九種目である。このうち、競技化を否定し、試合をしないのは合気道だけである。他の種目はほとんど「競技」を中心に普及・振興がはかられており、嘉納が提唱した「人間教育」は後ろに追いやられているように見受けられる。また、今や、交通・通信手段は飛躍的に発達し、試合結果は瞬時に映像として世界を駆けめぐる時代である。「勝利至上主義」という価値の一元化も地球規模で進んでいるということが言えよう。

武道の殿堂日本武道館が中心となって、武道資料を収集し、文化政策として武道博物館や武道図書館の設置を検討、推進していく必要がある。

そうしたグローバル化の時代にあって、カラー柔道衣問題が起きたとき、日本は「伝統を重んじる白い柔道衣」を主張した。この問題について、「だがもし武道観から白にこだわるというのが本当であったなら、日本人は白、他はご自由に、

と主張すべきではなかったか。日本側は、闘う双方の選手に白を押しつけようとして戦略的に失敗したのである。これもまた、みずからの武道観を他国に投影しようとして自滅した例である(五)」と松原隆一郎が述べているように、中途半端なこだわりはかえって諸外国の反発を招くだけである。あの時、柔道がこだわったのは「講道館柔道の白」であり、それ以外の柔術諸流の伝統には目が注がれていなかったことを忘れてはならない。確かに講道館は「白い柔道衣」であったかもしれないが、それ以外の柔術諸流においては、黒対白、藍対白といった色違いの柔道衣が幕末のころより使われていたことは、すでに第3章「柔道衣と色」＝257ページで明らかにしてきたところである。

われわれはよく、「歴史」とか「伝統」とかを口にするが、明治期に成立した近代武道すら十分に検証されていないのが実情である。この日本の地に脈々と受け継がれ、豊富に存在する柔術をはじめとする武術・武道文化の地下水脈（資料）を十分生かしきっていないことに問題があるのである。「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る」―そのためには、故きを温ねる拠(よ)り所(どころ)が必要である。

日本スポーツの殿堂・国立競技場には「秩父宮記念スポーツ博物館」があり、東京ドーム球場にも「野球体育博物館」がある。それぞれ、国内におけるスポーツの歴史と発展を検証する博物館をもっている。しかし、武道の場合、その殿堂たる日本武道館には博物館が存在しない。あまつさえ、世間では「日本武道館＝コンサート会場」というイメージの方が強く、このままでは日本武道館の存在意義が廃るというものである。

たとえ地味で見栄えはしなくても、武術・武道の基礎資料の重要性に注目し、その総合力の上に、

武道文化施策を企画・立案してほしいものである。それが、長い目で見た武道再生の入り口であり、諸外国が日本に求めている、本家としての責務を果たせることにつながっていくのではなかろうか。

今や、武道人口の量的な拡大から質的な充実へと転化すべき時代に入っていることをまず認識し、散逸しかかっている関係資料を集積する事業に早急に取り組むべきではなかろうか。一つの種目にこだわらず、武道界の全体を見渡し、世話することができるのは日本武道館だけである。その日本武道館が中心となって、武道博物館や武道図書館の設置を検討、推進していく必要があると考える。建物は立派であっても、そこに歴史と伝統を検証し、未来に向けての原動力となる武道資料が揃っていなければ、いつまで経っても「魂の抜けた殿堂」でしかないことを関係者は肝に銘じてほしい。

●註（五）松原隆一郎『武道を生きる』NTT出版、2006年。